

文献に見る古代山城の成立とその過程

九州ルーテル学院大学教授 板楠和子氏



板楠和子（いたくす・かずこ）

昭和44年熊本大学法文学部卒業。昭和49年同
大学大学院文学研究科修了。九州女学院高校
教諭を経て、平成10年から九州ルーテル学院
大学講師、平成15年から現職。
主な著書に『熊本の歴史』（山川出版、共著）、
『新熊本市史』（新熊本市史編纂委員会、共著）、
「石棺と石作部」（『古代王権と交流』8巻、名
著出版）など。

1 はじめに

私がいただいたのは「古代山城の成立とその過程」というテーマです。今日用意した史料は、鞠智城を考える上で必要ではないかと思う肥後国の関連史料を中心に集めています。「1」以外は白文のままで返り点を打っておりませんし、意識をして原文を引用していないものも一点あります。興味のある方は参考にしていただきたいと思います。

2 白村江の戦いと肥後

まず、レジュメの「1」は、『日本書紀』持統天皇十年四月二十七日条ですが、この史料から実は肥後の国の住民も白村江の戦いに出陣をしていたことが分かります。つまり、肥後国の人々と朝鮮半島で起こった対外戦争が無関係ではなかったことを示す文献的な証拠を引用しています。

内容は、伊予国出身の物部葉という人物と肥後国の皮石郡（合志郡）の壬生諸石という二人の人物が、「久しく唐地に苦しむを慰むるを以つてなり」という理由で、朝廷から「追大貳」という位階や絹織物、絹糸、麻布、鍬、稲、水田四町を下賜され、さらにその家族も当時の税の一種である調役を免じられたというものです。「久しく唐地に苦しむを慰むるを以つてなり」という記述から、壬生諸石

と物部葉は白村江の戦いに出兵しており、唐・新羅の連合軍のうち唐軍の捕虜になって唐にまで連行されていたのですが、運よく三十四年たつて無事に本国に帰還することができたので、朝廷がこの二人の労苦に対し厚く報いたことが分かります。こういう例はほかにも『日本書紀』や『続日本紀』などを調べると、天智天皇三年から文武天皇の慶雲四年くらいまで国家の正史の中に出てきます。また『日本霊異記』という仏教説話集のなかにも、地方の郡司の祖先が白村江の戦いに出陣したという記事が載せられています。

3 戦後の対策

「2」は戦後の対策ということで、いくつか史料をあげています。最初に出てくるのが、防人と烽を対馬、壱岐、筑紫などの国に置く、また水城を築くという六六四年の条文です。このなかで「烽」がどういうところに設置されたのか、少し考えてみたいと思います。その当時「烽」が設置された具体的な場所は分かりませんが、参考となるのが八世紀の中ごろに成立した『豊後風土記』や『肥前風土記』に見える「烽」の記事です。レジュメのなかに烽の記述がある郡名とその数を一覧表として挙げています。

豊後国では大野郡、海部郡、大分郡、速見郡にだいたい一カ所か多くても二カ所の烽が設置されています。それに対して肥前国では、基肄城があった基肄郡に一カ所、小城郡に一カ所、松浦郡に八カ所。松浦郡内の八カ所の烽は、おそらく玄界灘沿岸から大宰府への連絡用だと思いますが、あと藤津

郡一カ所、彼杵郡三カ所、高来郡五カ所となっています。地理的關係で見ると藤津郡、彼杵郡、高来郡は島原半島に位置しており、高来郡というのは有明海を挟んで肥後国玉名郡の対岸ですが、なぜ島原半島にこんなにくさんの「烽」を置かなければならないのかという疑問がわいてきます。これらの「烽」は彼杵、高来、藤津、小城、基肆を通して大宰府までの連絡用ですが、これはやはり玄界灘方面から有明海の方面へ回って敵船が侵入してくるルート沿いの連絡用という意味もあったのではないかと考えられます。これは八世紀の状況ですが、やはり白村江の敗戦後に有明海方面にも敵船侵入の警戒態勢がとられていたことを推定できる重要な手がかりだと思っています。有明海を挟んで肥前国高来郡の対岸が肥後国玉名郡となり、玉名郡を流れる菊池川の上流に鞠智城が位置しています。肥後の風土記は逸文だけで全文が残っていません。もし残っていたら鞠智城にいたる「烽」連絡網など、興味ある比較対照ができたのではないかと思います。

次に挙げたのは防人に関する史料です。当初の実態がどうだったか。『万葉集』防人歌の研究によってまとめられた一覧表をもとに見ていきたいと思います。まず、防人歌作者の出身国名を見ていくと、遠江、相模、駿河、上総、常陸、下野、下総、信濃、上野、武蔵というように東国地方出身者で占められています。防人の組織を見ると、国造というような律令国家以前の地域のリーダーが集団をまとめる国造制の遺制がみられます。おそらく東国地域で作り上げられていた国造単位の支配関係のままに、壱岐や対馬などの要所に防人が配置されていたのではないかと考えられています。

では、なぜ防人として東国の兵力が配置されたのかについて、その理由としてはいくつかの説が出されています。一つには先に挙げた史料で見たように、西日本が白村江の出兵のときの中心勢力、出

征軍の中核を成していて、多くの犠牲者をだしてしまったことと関係あるのではないかという説です。つまり、西日本各地から防人が十分に徴集できず、主として東国兵士を配置せざるを得なかったという説です。防人は、後の律令国家が作り上げた徴兵制、軍団の組織と明らかに違うものですから、参考までに挙げておきました。

4 律令国家の成立と隼人問題

「2」の7が鞠智城に関する初見史料です。鞠智城は、『続日本紀』の文武天皇二年（六九八）五月条に初めてでてきます。「大宰府をして大野、基肆、鞠智の三城を繕治せしむ」という記事で、鞠智城などを修理したという意味に解釈されています。文献の立場からいうと、一番肝心な「鞠智城が、いつ建設されたのか」という築城自体の年月日や、その後八世紀の鞠智城を伝える記事がないのです。鞠智城の発掘調査が始まる前から文武天皇二年五月条は、築城ではなく修造を示す史料と考えられていましたが、この三十年近く行われてきたことは、いわばこの条文をどう解釈するか、文献記事を史料批判するための地道な調査の蓄積だったと思っています。つまり、大野城や基肆城と同時期に築造されたのか。それとも別の時期に築城されたのか。これはここで発掘調査された結果、遺構・遺物がどこまで遡れるか、その見解が分かれてくる大きな問題だったのです。

参考までに、古代において「鞠智」はどのように読まれていたのでしょうか。十世紀初頭に成立した『和名類聚抄』によると、菊池郡に「くくち」という読みがついています。現在は「きくちじょう」

と発音していますが、当時は「くくちじょう」と呼んでいたのではないのでしょうか。

次に隼人と肥後国の問題に触れたいと思います。律令国家の成立とは、今まで地域の国造などと呼ばれる有力者が支配していた土地と人民を国家自身が人民の数を登録・把握をして、それに税をかけた国家の体制を敷く、そういう言い方もできるかと思います。実は、隼人の事件が非常に大きくクロージアアップされるのは大宝二年（七〇二）と養老四年（七二〇）で、二回目は中央から大伴旅人が総大将として征討に向かうほどのものでした。その時、「3」の8の史料ですが「斬首獲虜合わせて千四百人余り」を副大將が報告をしたという記事があります。それ以降は大きな叛乱はないのですが、その叛乱が起きた年は、律令国家が戸籍を作るその年とよく符合しているのです。九州でも大宝二年に作成された筑前国の戸籍や豊前国の戸籍が残っていますが、その戸籍には軍事的な功績をあげた人に与えられる「勲位」を持った人物が記載されていて、おそらく隼人制圧に筑前・豊前からも出動していたことが考えられます。

もう一つ重要なのは、肥後国がこの隼人対策に最前線の役割を担っていたということです。例えば、「天平八年薩摩国正税帳（税の収支を記載したもの）」によると、出水郡と高城郡、この二郡はもともと肥後国に近いのですが、その出水郡の郡司として「勲七等肥君」、薩摩郡にもやはり郡司として「主帳勲十二等肥君広竜」という人物が見えていて、肥後国南部で最も大きな力を持っていた肥君の一族が隼人支配の中心地に送り込まれていたことが考えられます。さらに肥後国の一般の人も移住させられています。『和名類聚抄』によると、薩摩国高城郡の六郷のうち（行政区画で一番下の単位）合志、

飽多、宇土、託萬の四つの郷名が肥後の郡名と一致しており、肥後の民が「五十戸」くらいの単位で合計「二百戸余り」が移住させられた結果ではないかと考えられています。律令体制の成立時において鞠智城は筑後・豊後・肥後の国境に位置しますが、肥後南部は隼人対策の最前線の地位にあったのです。

5 木簡史料について

「4」の1の資料は、鞠智城で一例だけ出土している木簡です。「秦人忍」は「はたひとのおし」と呼ぶのでしょうか。次の文字が抜けていますが、「五斗」という単位から、おそらく「米」ではないかと推定されています。この時期の律令国家は白村江の敗戦処置をしながら、一方では律令体制を九州諸国に施行するという課題を持ち、鞠智城造営のための労働力の確保や防衛兵力の動員もしなければいけなし、一方で税も集めないといけないという複雑な課題を抱えていたのです。

この木簡は、穀物を鞠智城まで運んで納入する体制ができていたことを示しています。鞠智城は対外的な軍事的拠点であると同時に、大宰府行政の肥後の周辺における拠点であったと解釈できる史料ではないかと思っています。もう一度、鞠智城がクロースアップされるのは、ずっとこの九世紀に入ってからです。今後、たくさんの方に興味をもって見ていただきたいと思います。

百済救援軍捕虜帰還者一覧

帰国年	出身国・郡	兵士名	出典
天智天皇 3年	—	土師連富 杵水連老 弓削連元宝	日本書紀 持統4・10・乙丑条
天智天皇 10年	筑紫	筑紫君薩夜麻	同書 天智10・11・甲午条
天武天皇 13年	— 筑前	猪使連子首 筑紫三宅連得許	同書 天武13・12・癸未条
持統天皇 4年	筑後	大伴部博麻	同書 持統4・9・丁酉条 持統4・10・乙丑条
持統天皇 10年	伊予 肥後	風速皮石 物部葉 壬生諸石	同書 持統4・10・戊戌紀
文武天皇 慶雲4年	讃岐 陸奥 筑後	那賀太山門 錦部刀良 壬生五百足 許勢部形見	続日本紀 慶雲4・5・癸亥条
—	伊予	越知	日本靈異記・上巻・第17
—	備後	三谷	日本靈異記・上巻・第7

【1】白村江の戦いと肥後
『日本書紀』卷三〇持統天皇十年（六九六）四月戊戌（廿七）
以追大貳、授伊豫國風速郡物部葉、與肥後國皮石郡壬生諸石。并賜人絶四匹・絲十絢・布廿端・鈎廿口・稲一千束・水田四町。復戸調役。以慰久苦唐地。

【2】戦後の対策

- 1 『日本書紀』卷二七天智天皇三年（六六四）是歲条於對馬嶋・壹岐嶋・筑紫國等、置防與烽。又於筑紫築大堤貯水。名曰水城。
- 2 『日本書紀』卷二七天智天皇四年（六六五）八月遣達率答怱春初、築城於長門國。遣達率憶禮福留・達率四比福夫於筑紫國、築大野及椽二城。
- 3 『日本書紀』卷二七天智天皇六年（六六七）十一月是月是月、築倭國高安城・讃吉國山田郡屋嶋城、對馬國金田城。
- 4 『日本書紀』卷二七天智天皇八年（六六九）是冬是冬、修高安城、收畿内之田稅。
- 5 『日本書紀』卷二七天智天皇九年（六七〇）二月造戸籍。又修高安城、積穀與鹽。又築長門城一、筑紫城二。
- 6 『日本書紀』卷三〇持統天皇三年（六八九）九月己丑（十）遣直廣參石上朝臣麻呂・直廣肆石川朝臣蟲名等於筑紫、給送位記。且監新城。
- 7 『続日本紀』卷一文武天皇二年（六九八）五月甲申（廿五）令大宰府繕治大野・基肆・鞠智三城。

『豊後風土記』・『肥前風土記』に見える「烽火」

国	郡	烽	国	郡	烽
豊後	大野	1	肥前	基肆	1
豊後	海部	2	肥前	小城	1
豊後	大分	1	肥前	松浦	8
豊後	速見	1	肥前	藤津	1
			肥前	彼杵	3
			肥前	高木	5

防人歌作者の配列順序

国名	国造	丁	助丁	主帳丁	火長	上丁・防人	国名	国造	丁	助丁	主帳丁	火長	上丁・防人
遠江	国造	丁1		主帳丁1		防人5	下野					火長3	上丁8
相模			助丁1			上丁2	下総			助丁1			無10
駿河			助丁1			上丁1 無8	信濃	国造	1		主帳1		無1
上総	国造	丁1	助丁1	帳丁1		上丁9	上野			助丁1			無3
常陸			助丁1			上丁1 無5	武蔵			助丁1	主帳1		上丁5 上丁妻1

8* 『和名類聚抄』 卷5

肥後国管十四田二萬三千六百五十八畝、正倉三十五萬畝、本領百五十七萬九千八百八十八畝、諸郡七十七萬九千八百八十八畝

玉名伊多 山鹿加久 菊池加久 阿蘇阿蘇 合志加久 山本佐々

鮑田多安 託麻多安 益城國朝 宇土 八代佐賀 天草佐賀

葦北阿多 球磨久高

9 『続日本紀』 卷一文武二年（六九八）八月丁未

〔廿〕

修理高安城。〔天智天皇五年築城也。〕

10 『続日本紀』 卷一文武三年（六九九）十二月甲申

〔四〕

令大宰府修三野・稻積二城。

11 『続日本紀』 卷二大寶元年（七〇二）八月丙寅〔廿六〕

廢高安城、其舍屋、雜儲物移貯于大倭・河内二国。

12 『続日本紀』 卷五和銅五年（七二二）正月壬辰〔廿三〕

廢河内国高安烽、始置高見烽及大倭国春日烽、以通

平城也。

〔3〕 律令国家の成立と隼人問題

1 『続日本紀』 卷二大寶二年（七〇二）九月戊寅〔十

四〕

討薩摩隼人軍士授勳各有差。

〔3〕 律令国家の成立と隼人問題

2 「大宝二年筑前国島郡川邊里戸籍」

戸主追正八位上勳十等肥君猪手 年伍拾參歳 正丁大領

勳十等肥君泥麻呂

3 「大宝二年豊前国上三毛郡塔里戸籍」 戸主勳十一等塔勝岐弥

4 「大宝二年豊前国仲津郡丁里戸籍」 勳十等狭度勝与曾弥

5 * 「続日本紀」卷六和銅六年（七一三）八月辛丑「壬辰朔十」

（八月十日）從五位下道公首名、至自新羅。（八月二十六日）從五位下道君首名為筑後守。（筑後守兼肥後守任命）

6 「続日本紀」卷六和銅七年（七一四）三月壬寅「十五」

隼人、昏荒野心、未習憲法。因移豊前国民二百戸、令相勸導也。

7 「続日本紀」卷八養老四年（七二〇）二月壬子「廿九」

大宰府奏言、隼人反、殺大隅国守陽侯史麻呂。

8 「続日本紀」卷八養老五年（七二二）七月壬子「七」

征隼人副將軍從五位下笠朝臣御室、從五位下巨勢朝臣

真人等還帰。斬首・獲虜合千四百餘人。

9 「天平八年（七三六）薩摩国正税帳」 出水郡・

高城郡（国府所在地）肥後国境（出水郡）「大領外正六位下勳七等肥君」（薩摩郡）「主帳外少初位上勳十二等肥君広竜」

10 「和名類聚抄」卷9郷名 薩摩国高城郡（6郷） 合志・飽多・鬱木・宇土・新多・託萬

【4】木簡史料

1 鞠智城出土「付札木簡」（七世紀後半～八世紀初頭）「秦人忍口五斗」 長さ13・4センチ 幅2・5センチ

2 大宰府不丁地区出土「文書様木簡」（八世紀前半、天平末年）

「為班給筑前筑後肥等国遣基肆城稲穀髓 大監正六位上田中朝×」

（积文）「筑前・筑後・肥等の国へ班給するため基肆城の稲穀を遣わし、大監正六位上田中朝（臣）に髓わしむ？」

3 平城京出土「養老七年（七二三）肥後益城郡兵士歴名帳」（長さ23センチ丸い軸木）

「肥後国第三益城軍団養老七年兵士歴名帳」 軸小口

